

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

書物のなかの令嬢：
『趣味大観』にみる昭和初期東京における音楽

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/889

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



書物のなかの令嬢

——『趣味大観』にみる昭和初期東京における音楽——

周東美材

絆ちゃん、深窓の令嬢か。あれ、なんで「ふかまど」って書くんですかね。
(木皿泉脚本ドラマ『すいか』第5話、日本テレビ系列、2003年8月9日放送)

はじめに

本論文は、1935（昭和10）年刊行の『趣味大観』にみられる令嬢の記述について考察しながら、昭和初期東京の令嬢のあいだで、どのような音楽が嗜みとして語られていたのかを明らかにするものである。

従来の音楽史研究は、特定の音楽ジャンルや専門家に特化したものであることが多く、非専門家たちがどのように音楽に接していたのかについては不明な点が多かった。本稿で検討する『趣味大観』には、令嬢346名のプロフィールと趣味が記載されており、民間における音楽の享受や教習の状況を示している。1935年時点に限られた資料ではあるが、同時期の地域的な広がりを考えることができる。記述も複数の音楽種目、音楽以外の嗜みと多岐にわたっていることから、さまざまな文化ジャンルを比較することも可能な資料である。

近代日本における音楽享受が、女性との関係から説明されることはあっても、部分的な言及に留まってきた。比較的蓄積されている論考として、令嬢とも関係の深い高等女学校での音楽享受についての考察がある程度である¹。しかし、多くの近代日本音楽史の研究がこれまで前提としてきた洋楽受容や西洋化という視点をとることを、本稿では差しひかえる。洋楽受容という視点を導入することで生じるバイアスを避けるためである。バイアスとは、女性を、洋楽受容を支えた主体として語る仕方に孕む問題のことである。

本稿では、まず、『趣味大観』という資料の特徴について確認する（第1節）。つづいて、音楽以外を含めた令嬢の趣味の全体的な状況を考察し（第2節）、令嬢が嗜んでいた音楽について、挙げられることの多かった音楽ジャンルを、地域的な特徴や師事していた師匠も含めて明らかにする（第3節）。以上を踏まえて、令嬢とはいかなる存在として語られていたのかを示し、

1 安田・北原（1998）、坂本（1999、2002）など。

なかでも資料がもつメディアとしての特性に着目し考察を試みる（第4節）。なお、本稿で資料を引用するさいには、原則として新漢字・旧代仮名遣いとし、人名は原本通りとした。

1. 資料としての『趣味大観』

1.1 『趣味大観』とは

『趣味大観』は、1935（昭和10）年12月25日に趣味の人社から発行された。総計1,389ページ²に及ぶ巨編で、定価は35円とたいへん高価な書物である。鶴橋泰二（鶴橋聞天）³により編集され、趣味の人社内の14名を中心に多くの労力を結集し、2年余りを費やして刊行された。本書は、半年も経たない1936（昭和11）年5月15日に増補版を発行しており、本論文では増補版を参照している。なお、趣味の人社は本書に先立って1927（昭和2）年に『現代音楽大観』を編集している⁴。

鶴橋によって記された「発行に際して」は、『趣味大観』刊行の理由を次のように語っている。

現代に活躍せる著名の人士が如何に趣味を撰び、如何に趣味と生活を連繋し、如何に趣味が人格陶冶に關連裨益せるかを各個人毎に研調詳述し、復た総括的提綱の言としては各趣味道の起原沿革に筆を走らせてその全貌を瞭かにし、以て普く江湖に頒ちて人生処世の伴侶に資すべく上梓した所以である。

趣味は生活や人格と密接に関わるものであるため、著名な人士の趣味を研究、参考にすることを目的に、『趣味大観』は編集されたという。

鶴橋が記した『趣味大観』の「緒言」によれば、趣味とは次のようなものであった。

趣味とは、一個の人間が事物の『趣』を味ふ力である。趣味は飽くまで主観的であり、変化性を有してゐる。趣味は良心に相似て一種の心身の活動であるから、能力ではない。而して趣味の含有する要素は直観・判断・実行の三が共在してゐるのである。

「緒言」にも記されているように、趣味には「判断」の要素が含まれ、美的な判断が求められていた。『趣味大観』は、趣味によって人格を陶冶し「人生処世の伴侶に資すべく」、著名で

2 ページ数は筆者のカウントによる。本書は、通しのページ数ではなく、目次、各部、各編単位のページ数で、「緒言」や「発行に際して」についてはページ数が付されていない。

3 鶴橋聞天の著作には、いずれも官界往来社から刊行された『軍部の寸描』（1937年）、『ソ連の横顔』（1937年）、『老獺英国を暴く』（1938年）がある。

4 『現代音楽大観』は、倉田喜弘監修『昭和前期音楽家総覧——『現代音楽大観』』全3巻として、ゆまに書房から2008（平成20）年に復刻されている。

理想的な人士やその家庭で、趣味が実際にどのように営まれているかを調査し、大観しようとしたものであった。

『趣味大観』は、「趣味道に関する文献」「現代趣味家総覧（以下、趣味家総覧と略記）」「現代代表令嬢総覧（令嬢総覧と略記）」の3部で構成されている。「趣味道に関する文献」は6編に分けられ、趣味がジャンルごとに分類され、それぞれの趣味の起源、沿革、現状などが説明されている。

「趣味家総覧」は、実業界の成功者を中心に政治家、軍人、銀行家、医師、学者、芸術家など名望家と目される大物の経歴と趣味が記されている。各人の肩書、氏名、趣味の一例を記載順に示すと、能楽女流大家・露木知子（能楽・茶道）、従三位勲二等工学博士海軍造兵中将・野田鶴雄（長唄・俳句）、日本古典音楽研究家・田中治之助（和楽・南画）、小児病院長・瀬川昌世（陶器・能楽）、日本乗馬協会等理事・牧田清之助（能楽・乗馬）、元老院議長・大木喜福（野球・釣魚）、田中興業田中貯蓄銀行頭取・田中武兵衛（能楽・ゴルフ）、華族女学校校長・細川一之助（囲碁・詩吟）といった名が連なり、多額納税者との記載も目立つ。音楽家では、弘田龍太郎（作曲）と山田耕筰（洋楽・絵画）が記載されている。

「令嬢総覧」は、基本的な記載形式は「趣味家総覧」と同じだが、あえて令嬢だけを取りだして記載したものである。巻頭の「発行に際して」には、『現代代表令嬢総覧』は現代に於ける名家の令嬢の趣味と家庭の関係等を収録せるもので、その種編纂の嚆矢を為すものであると宣言されている⁵。

1.2 『趣味大観』の調査過程

『趣味大観』巻頭にわざわざ記された「発行に際して」によれば、「総覧」にかんする調査プロセスは以下のものであった。

個人の續述に於ては雅号・生年月日・出生地其他の記述に就いての抱負或は希望・経験などの精校、学歴・経歴家庭関係なども可及的に登載すべく再三再四出向面接に努めたこともあつた。然るに我等の企図に対して無理解にして面会を拒絶、或は姑息にも趣味に就ての掲載を拒むなどの怯懦の士もあつてその苦闘は筆舌に尽し難いものもあつたが、飽くまでも初期の貫徹に猛進し内容に掲ぐるが如く全国各枢要地を略遍歴して殆んど初期の目的を達し得たのである。なほ本書編纂中種々の中傷的讒誣或は故意の妨害などの襲掖も体験したが、堅念不拔の信念の吾等は遂に天業の完成に着くを得、個人の所謂「進篋雖微、終焉成山」の名言を実行し得たことを欣幸とす。

5 令嬢のプロフィールを集めたものとしては、読売新聞記者で『当世名家蓄音機』の編者である關巖二郎の『明治の令嬢』（關 1892）がある。令嬢45名の生い立ち、経歴、写真などが掲載されており、見本とすべき女性像を提示していったことは『趣味大観』と共通しているが、住所の記載はなく、趣味については記述があるものとないものがある。

趣味家もしくは令嬢のもとまで、調査員が出向し、記載すべきデータを引き出してきたことがわかる。調査・記載すべき事項はあらかじめ決まっており、それらについて面接をしながら聞きとり、細かな事実関係や固有名詞については確認しつつ書きとったものと推測される。企図にたいする無理解が何を指し、なにゆえに面会を拒んだのかについては記されていないが、いずれにしてもこの調査は困難を極めたものであったという。『現代音楽大観』の前例がなければ、いっそう難航したことだろう。調査過程については、データを読む方法にもかわる問題であり、留意する必要がある。

1.3 『趣味大観』の記述

『趣味大観』の各総覧は、おおむね決まった体裁をとって記述されている。「令嬢総覧」の記載事項は、代表的趣味・氏名・住所・電話番号を必須として、令嬢の写真・誕生日・学歴・これまで嗜んできた趣味・師匠、父親の出身・経歴、兄弟の略歴といったプロフィールが主に列記されている。「令嬢総覧」1ページから2ページに記載されている令嬢のプロフィールの全文は、以下の通りである。

ピアノ 料理

竹居 富美子

東京都小石川区西原町 ××

電話大塚 (86) ××××

近代女性として豊かなる才智と明敏なる感覚を兼ね備へ、而もピアノ・料理を初め洋裁・花道・茶道・琴等凡そ女芸と云はるべきものすべてに浅からぬ素養ある富美子嬢は、東京府竹居光積氏の長女、大正2年3月を以て東京市に誕生し長じて府立第三高女を卒業された才媛である。父君光積氏は医学博士海軍々医少将としてその令名を知らるゝ人。而して嬢は多趣味のうち最も造詣の深きはピアノと料理であるが、前者は約5年前より斯界の権威西村テイ子女子に親しく指導を受け、自らも涙ぐましき精進刻苦に寧日なく、漸次其の妙諦を会得されつゝあるは偉とすべく、後者はこれまた視界に高名なる櫻井省三師の下に多年研鑽の日を重ねられ、特にフランス料理の研究に没頭して手腕の並々ならぬ知られてゐる。尚花道は小原流投入盛花を平一榮師に就いて修習を続け既に4ヶ年を経過してその著しき進境は稀に見るところであると云はる。また洋裁に寄する熱意深く、従つて斯道の心得も深きものがあるが、これは数年前御親戚の方より教導を受けられ今日に及んだものであり、加ふるに和服裁縫も奥田式の習得に専ら意を注がれてゐる。世には往々にして一方のみ偏する人を見る時、斯く和洋両様に只管なる修練を続けられるは賞めらるべき事でなければならぬ。茶道は夙に小学校在学時代その初歩を体得されて居り、目下は他の方面の研究に多忙なるまゝ中絶の状態である。琴に於ける素養また相当なものであつて、斯道も茶道と同様小学校時代より研究を始められ爾来鋭意精進中であつたが、先生移転のために其後中止の罷むなきに至つ

たのであつた。とは云へ其の技能は現今に於ても些も退歩せず、折を見ては天才ぶりを発揮せられてゐるといふ。尚又女学校時代はスポーツ女性の聞え高く、就中テニスをも最得意とされたことであつたが、近来は相手もなきため中止されてゐるが、熱意の点に於ては未だ誰人も劣らざるものがある。家庭は父君光積氏・母堂トミ子夫人ありて、朗らかな家庭である。

800字から1,000字程度の文字数のなかで、令嬢346名のプロフィールが、趣味を中心に記されている。

令嬢の住所や電話番号の明記は、「個人情報」と呼ばれているものにたいする意識や位置づけが、現代と昭和初期ではかなり隔たっていることを感じさせる。東京23区に相当する東京市内に在住の令嬢が327名を占めているが、これは面接が可能な範囲によって生じた限定であろう。東京市外のデータは少ないが、市内のデータは豊富であり、同時点における分布を検討することを可能にする。

写真は必須ではないため、上の引用のように写真の掲載のない令嬢もいる。その点で、女性雑誌の巻頭グラビアなどにみられる令嬢とは異なっており、本資料が情報源の広さを確保する利点ともなったかもしれない。写真は、すでに令嬢の手許にあったものが使用された場合と、新たに



中島清江 (1 ページ) 井上道子 (13 ページ) 乾道子 (23 ページ) 佐多芳子 (53 ページ)



山本姉妹 (126 ページ) 河井治子 (139 ページ) 渡邊妙子 (195 ページ) 熊崎姉妹 (213 ページ)

図1 令嬢の写真

撮影された場合とが考えられるが、趣味の実演の写真もあり、撮影の経緯については不明である。

『趣味大観』の記述がとくに興味深いのは、かつて経験したことのある趣味にまでくわしく踏みこんでいることで、いつごろ稽古していたのか、誰に習ったのかといったことまでも記されていることである。「趣味に就ての掲載を拒むなどの怯懦の士もあ」ったわけは、こうした点にもあったのかもしれない。

令嬢の形容には、「近代的」「叡智」「才媛」「天才」「端正」「優美」「温順」「明朗」「家庭的」などの語が用いられ、なかでも「近代的」という語は頻出する⁶。父親の経歴は、「趣味家総覧」と同じく、実業界の大物、政治家、軍人、銀行家、医師、学者、芸術家などが目立つ⁷。

『趣味大観』は、昭和初期における令嬢の趣味を検討するうえで、大変貴重な資料となるものである。次節では、「令嬢総覧」の記載事項を抜きだし整理することで、令嬢と趣味の関係について検討する。

2. 令嬢と趣味

2.1 令嬢の居住地

「令嬢総覧」に記載されている令嬢 346 名の住所をもとに、東京市内の各区の人数をまとめたのが表 1 である。

麹町区、芝区、麻布区、赤坂区、牛込区、淀橋区、渋谷区といった皇居以西の地域を中心に 20 名を超える令嬢の居住が示される。いっぽう神田区、日本橋区、京橋区、下谷区は 5 名から 7 名とわずかである。本所区、向島区、深川区、城東区はせいぜい 2 名といった分布を示しているにすぎない。これらの 3 つの地域は、従来、山の手、下町、川向うと称されてきたものであり、それぞれに異なった地域的性格を形成してきたものである⁸。

山の手は、江戸期の武家屋敷の跡地であり、明治以降に移住した官公吏、会社員といった新中間層が居住していった。彼らの多くは、武家や地方農村の上層農家を出自とし、江戸以来続いてきた都市の生活様式をもともと保有していなかった。これにたいして下町は、商人や職人といった旧中間層、都市自営業層を主たる構成員としていた。下町は、明治末までは江戸の文化を色濃く残し、寄席などの娯楽が根付いていた。川向うは、明治 30 年代以降、新たな工場地帯と化し、工場労働者たちが増加した。地方農村からの人口流入も進み、場末のスラムを一

6 現在における令嬢の代表的な形容である「深窓」という語は、本書にはほとんどみられない。令嬢の形容にかんする問題は、別途検討を要する。

7 父親の経歴もまた、令嬢の階層的な理解のためには重要な問題であるが、いくつかの理由から本稿で扱うのは見おくることとした。ひとつには、複数の業務や役職を兼任していることが多く、主たる収入源の特定や、業務内容の把握が難しいためである。また、地方出身者が多く、士族出身者が多い傾向は認められるものの、『趣味大観』の記述内容が一貫しているわけではなく、詳細がわかる場合と無記載の場合とがあるからである。

8 都市生活の地域別の性格や都市文化の性格については、寺出（1994：142-84）を参照。

表1 令嬢の居住地

東京市	令嬢数	東京市	令嬢数	東京市外	令嬢数	
麹町区 (千代田区)	28	品川区 (品川区)	14	埼玉県北足立郡鳩谷町	1	
神田区	5	荏原区	4	千葉県葛飾町小栗原	1	
日本橋区 (中央区)	5	目黒区 (目黒区)	5	千葉県千葉	1	
京橋区	7	大森区 (大田区)	11	市川市市川	1	
芝区	27	蒲田区	0	北豊玉郡国分寺	2	
麻布区 (港区)	24	世田谷区 (世田谷区)	5	横浜市中区滝ノ上	1	
赤坂区	22	渋谷区 (渋谷区)	28	横浜市鶴見区生麦	1	
四谷区	6	中野区 (中野区)	12	神奈川県足柄下郡湯ヶ原宮上	1	
牛込区 (新宿区)	24	杉並区 (杉並区)	5	大阪市東区森ノ宮西之町	1	
淀橋区	23	豊島区 (豊島区)	10	大阪市西区薩摩堀北ノ町	1	
小石川区 (文京区)	29	滝野川区 (北区)	4	大阪市南区順慶町	1	
本郷区	17	王子区	0	大阪市南区末吉橋通	1	
下谷区 (台東区)	6	荒川区 (荒川区)	0	大阪市北区兎我野町	1	
浅草区	2	板橋区 (板橋区・練馬区)	0	大阪市北区松ヶ枝	1	
本所区 (墨田区)	0	足立区 (足立区)	0	大阪市東成区猪飼野町西	1	
向島区	2	葛飾区 (葛飾区)	0	大阪府泉北郡浜寺町	1	
深川区 (江東区)	2	江戸川区 (江戸川区)	0	神戸市中尾町	1	
城東区	0			兵庫県武庫郡御影町	1	
()内は現在					計	346

部に形成し、都市下層社会を形成していった。

関東大震災は、とりわけ旧市街である下町地域に壊滅的な打撃を与え、渋谷区や世田谷区などへの郊外移転の契機となった。鉄道会社や開発会社による大規模な宅地開発や娯楽・保養施設の建設も進み、たとえば、堤康次郎の箱根土地株式会社（後の西武グループ）による目白文化村や新宿園の建設などのような郊外開発が、1920年代後半から加速する。

開発の一方で、慢性的な不況にもさらされていた。なかでも、1927（昭和2）年の金融恐慌、1930（昭和5）年の世界恐慌は、中小企業の倒産、失業、労働争議を増加させた。そのようななかで、青野季吉は、新中間層の代表であるサラリーマンを分析して、彼らの生活が晒されている恐怖や不安と、富裕層に対する複雑な心情を描きだした。サラリーマンは、ブルジョアジーではないながらも知識階層であり「文化を支持し、促進する階級」（青野 1930:70）であった。サラリーマンはジャズ、ダンス、カフェなどの近代的な顔麿の狂酔者であったが、同時に、ブルジョアジーの生活にたいする「あこがれ、羨望、模倣欲が、つねに彼等を心理的、生活的に刺戟してゐる」（青野 1930:28）と、青野は説明した。

令嬢の居住地の分布は、東京の地域的特性と重なり、階層的な特徴にかんするこれまでの説明も裏付けているようである。とはいえ、地域性や階層性との関連の強調は、かえって資料の見方を縛ってしまう危険がある。令嬢は山の手地区に住むことが多かったと即断するよりも、令嬢は

山の手地区と関連をイメージさせるかたちで記述、説明されていたと考えたほうが正確といえる。

2.2 令嬢の出身校

令嬢の出身校は、表2の通りである。記載データは出身の高等女学校を基本とし、在学中、退学、付属小学校在学中を含むものとした。また、高等女学校卒業後、大学に進学した場合には大学名をデータとした。ただし、東京家政学院、お茶の水家庭寮、民間の私塾などに進学し専門教育を受けていた場合には、その学校が現段階では特定できないもの、在学期間や学校としての制度的な位置づけが不明なものが多いため、高等女学校を出身校のデータとした。そのため、かならずしも最終学歴を示すものではない。

居住地と同じく出身校もまた顕著な偏りを示しており、出身校として圧倒的に多かったのは、雙葉高等女学校41名と、女子学習院39名である。上位10校の合計数が198名で、全体の57%を占めている。

「才媛」という形容が用いられていたことからわかるように、令嬢には一定の学歴や教育が求められていた。令嬢であるためには、ただ家の奥に匿われているのではなく、競って学力や教養を身につけることが必要だった。その反面、高度に専門的な学識を身につけていった例や、専門教育や学歴を活かした職業に就いていったようなケースは数件しか見あたらず、二重基準的な原則が適用されている。また、花嫁修業として家政全般を学ぶ姿勢も求められていたにもかかわらず、家政を主とした実科高等女学校に通った例もわずかである。

ただし、出身校の偏りは、調査対象の選定プロセスにおいて生じたものである可能性がある。うまく面接での聞きとりが進んだ場合、訪問先で同級生や同窓生、先輩後輩などを紹介してもらい、芋づる式に調査が進められたことは、じゅうぶんに考えうることだからである。知人や友人の紹介が得られれば、調査目的への理解や賛同も得やすかったはずだ。調査過程のなかで学校を媒介にして社会関係の閉じた圏域が形成されてしまうことも考えられるので、偏りをそのまま現実の反映と考えるのは危険である。出身校にかんする記述もまた、令嬢イメージの説明のために動員される用語として、限定的に捉えるべきであろう。

2.3 令嬢の代表的趣味

「令嬢総覧」の各令嬢の記述の冒頭には、令嬢の代表的趣味が、1件乃至2件記されている。令嬢の趣味の範囲は多岐にわたっているが、恣意的な分類を避けるため、『趣味大観』における趣味の種目分類に即して整理する。「趣味道に関する文献」は、表3に引用した6編にわたって、趣味を分類している。

第1編は音楽、第2篇は工芸・彫刻・美術、第4編はスポーツ、第5編は園芸・動物、第6編は蒐集などと、ある程度の分類指標は判別できるが、第3編の分類はかなり混乱したもののように見える。また、各編の分類をよくみてみると、「煙草」は第3編に分類されているが、「煙管」は第6編に分類されている。第6編のなかには、「鈴」の項目が2つ立っている。「追分節」と

表2 令嬢の出身校

出身校	人数	出身校	人数
雙葉高等女学校（雙葉中学校・高等学校）	41	文化学院女学部（文化学院高等課程）	1
女子学習院（学習院女子中・高等科）	39	堀越高等女学校（堀越学園堀越高等学校）	1
聖心女子学院高等女学校 （聖心女子学院中等科・高等科）	27	女子美術大学（女子美術大学）	1
東京女学館（東京女学館中学校・高等学校）	21	女子聖学院普通部（女子聖学院中学校・高等学校）	1
東京女子師範学校附属高等女学校 （お茶の水女子大学附属中学校・高等学校）	15	関東高等女学校（関東国際高等学校）	1
仏英和高等女学校（白百合学園中学校・高等学校）	14	錦秋高等女学校	1
三輪田高等女学校（三輪田学園中学校・高等学校）	11	麴町高等女学校（麴町学園女子中学校・高等学校）	1
跡見女学校（跡見学園中学校・高等学校）	10	日本音楽学校（有明教育芸術短期大学）	1
日本女子大学校付属高等女学校 （日本女子大学中学校・高等学校）	10	立教高等女学校（立教女学院中学校・高等学校）	1
東洋英和女学校（東洋英和女学院中部・高等部）	10	立正高等女学校（東京立正中学校・高等学校）	1
九段精華高等女学校	8	佐藤高等女学校（女子美術大学付属高等学校・中学校）	1
東京府立第三高等女学校（東京都立駒場高等学校）	8	成女高等女学校（成女学園中学校・高等学校）	1
東京府立第六高等女学校（東京都立三田高等学校）	8	成城高等女学校（成城学園中学校高等学校）	1
山脇高等女学院（山脇学園中学校・高等学校）	8	頌栄高等女学校（頌栄女子学院中学校・高等学校）	1
東京府立第一高等女学校（東京都立白鷗高等学校）	7	淑徳高等女学校（淑徳中学校・高等学校）	1
精華高等女学校（東海大学付属望洋高等学校）	6	東京家政専門学校	1
駿河台女学院（東京YWCA）	6	東洋女子歯科医学専門学校（東洋学園大学）	1
実践高等女学校（実践女子学園中学校・高等学校）	5	埼玉県川口実科高等女学校（川口市立川口総合高等学校）	1
日本女子大学校（日本女子大学）	5	千葉県立千葉高等女学校（千葉県立千葉女子高等学校）	1
桜蔭高等女学校（桜蔭中学校・高等学校）	5	横浜紅蘭女学校（横浜雙葉中学校高等学校）	1
東京府立第五高等女学校（東京都立富士高等学校）	5	大阪府立清水谷高等女学校（大阪府立清水谷高等学校）	3
青山女学院（青山学院中等部・高等部）	4	大阪府立大手前高等女学校（大阪府立大手前高等学校）	1
東京府立第二高等女学校（東京都立竹早高等学校）	4	大阪市立高等東女学校（大阪市立東高等学校）	1
普連土高等女学校（普連土学園中学校・高等学校）	3	大阪相愛女学校（相愛高等学校・中学校）	1
京華高等女学校（京華女子中学高等学校）	3	聖母女学院高等女学校（大阪聖母女学院中学校・高等学校）	1
香蘭女学校（香蘭女学校中等科・高等科）	3	兵庫県立第一高等女学校（兵庫県立神戸高等学校）	2
成蹊高等女学校（成蹊中学校・高等学校）	3	神戸女学院中部・高等学部	1
杉野芳子ドレスメーカー女学院（杉野服飾大学）	3	甲南高等女学校（甲南高等学校・中学校）	1
東洋女学校（東洋女子高等学校）	3	唐津町立唐津高等女学校（佐賀県立唐津西高等学校）	1
本郷区立誠之小学校（文京区立誠之小学校）	2	大連高等女学校	1
自由学園女子部普通科・高等科 （自由学園女子部中等科・高等科）	2	家庭教師	1
大妻高等女学校（大妻中学高等学校）	2	ヨーロッパ留学	3
東京女子大学（東京女子大学）	2	不明	4
東京音楽学校（東京芸術大学音楽学部）	2		
（ ）内は現在			計 346

「浪花節」はスポーツの第4編に分類されているが、「ピンポン」は第4編ではなく第3編に属している。第1編の音楽の分類も、日本音楽にかんしては細かく分類しているのにたいして西洋音楽は一括りになっていたり、豊後節だけ「系統と趨勢」として立項されたりしている。編

表3 「趣味道に関する文献」による趣味の分類

	種目
第1編	日本音楽、雅楽、声明、能楽、尺八、箏曲、一絃琴・八雲琴・二絃琴、吉備楽、琵琶、義太夫節、河東節、一中節、豊後節の系統と趨勢、常磐津節、新内節、園八節・繁太夫節、富本節、清元節、荻江節、説教節、長唄、囃子方、小唄、歌沢節、民謡、演歌、舞踊、西洋音楽、我国に於ける西洋音楽の発達
第2編	陶磁器、彫刻、鎌倉彫、篆刻、印譜、絵画、書道、仏像、漆器、蒔絵
第3編	茶道、花道、歌道、俳句、日本文学、日本美術、日本建築、銅器、川柳、漢詩、囲碁、将棋、酒、煙草、演劇、歌舞伎、舞台、映画、トーキー、社交ダンス、料理、手芸、蓄音器、写真、撞球、麻雀、小型映画、手品、魔術、卓球、西洋舞踊、レコード
第4編	剣道、刀剣、柔道、弓術、矢、相撲、馬術、競馬、庭球、野球、狩猟、釣、網、登山、ゴルフ、陸上競技、拳闘、レスリング、籠球、ホッケー、スキー、スケート、水泳、ヨット、ボート、モーターボート、スカル、自転車、飛行機、自動車、オートバイ、ハイキング、追分節、浪花節
第5編	造園、盆栽、盆石、園芸、犬、猫、狸、猿、蛙、鶏、伝書鳩、鶯、繡眼児、雲雀、鶉、金魚
第6編	古銭、紙幣、藩札、富札、千社札、絲印、印、郵便切手、印紙、色紙、短冊、古鏡、匂玉、矢立、郷土芸術、郷土玩具、仮面、人形、雛人形、鈴、紙鳶、杯、徳利、暦、煙管、扇子、鈴、きれち、槍、絵馬、ポスター、番付、商品券、ペン

集上の都合とも考えられるが、識別の基準が現代のものとは違っていた可能性がある。

いずれにせよ、この6分類の基本枠組みに従いつつ、項目の記載のない趣味を「その他」として整理したものが、表4である。

最も多いのが、生花で104名が代表的な趣味としている。つぎにピアノ87名、長唄70名と音楽関連の趣味が続き、書道、美術といったほかの芸術ジャンルを大きく引き離している。料理45名、茶道44名、手芸31名、洋裁28名と、花嫁修業と思われる嗜みもまた上位に入ってきており、趣味とはいっても単なる楽しみではなく、嫁入りというはっきりとした目的のある備えであったと推測される。落語、浪花節、映画といった当時ひろく親しまれていた娯楽は、いっさい挙げられていない。

全体的にみて第1編、第3編に属する趣味が圧倒的に多く、おおまかには花嫁修業と音楽にかんするものが、模範的な令嬢の趣味であった。もちろん、外向けに発信するプロフィールであるので、突飛なものではなく無難な趣味をみずから選んで掲載していると考えられるが、それでも規範に追従し、自身を説明しようとしたことは確かである。花嫁修業をするか、さもなければ音楽の稽古をするというのが、令嬢の趣味が語られるさいの典型的なパターンであった。

3. 令嬢と音楽

3.1 令嬢と音楽趣味

令嬢の代表的趣味のうち、音楽関連で最も多かったのはピアノ、ついで長唄、箏曲だった。ピアノが令嬢の趣味であったことは、ある程度推測できるが、反面ヴァイオリンの稽古をして

表4 令嬢の代表的趣味

	種目	人数		種目	人数		種目	人数
第1編	ピアノ	87	第2編	書道	21	第3編	生花	104
	長唄	70		日本画	9		料理	45
	日本舞踊	22		絵画	6		茶道	44
	音楽	19		洋画	5		手芸	31
	箏曲	19		油絵	5		洋裁	28
	舞踊	8		ダンス	2		和裁	13
	仕舞	7		鎌倉彫	1		裁縫	4
	声楽	5		書画	1		和歌	3
	能楽	3					文学	3
	三味線	3					刺繍	3
	ヴァイオリン	3					割烹	2
	ギター	1					読書	2
	和楽	1					短歌	2
	常磐津	1					観劇	1
							フランス刺繍	1
				デザイン	1			
				花道	1			
				ピンポン	1			
	種目	人数		種目	人数		種目	人数
第4編	スポーツ	19	第5編	盆景	2	その他	語学	16
	ゴルフ	5		犬	2		英語	6
	乗馬	5		園芸	1		仏語	2
	テニス	4		昆虫採集	1		タイプライター	1
	スキー	4			英文タイプライター		1	
	水泳	3			速記		1	
	スカル	2			数学		1	
	自動車	2			国史の研究		1	
	バスケットボール	1	第6編	人形蒐集	4		趣味一般	1
	水上スポーツ	1		玩具蒐集	1			
	ダイビング	1		人形	1			
	飛行機	1						
	ドライブ	1						
	運動	1						
	登山	1						
	散策	1						
	薙刀	1						

いる令嬢は非常に少ない。邦楽のジャンルでは長唄がもっとも多かった。日本舞踊、舞踊⁹の稽古も比較的多く行われている。

1.3でも述べたように、「令嬢総覧」には、代表的趣味の見出しのほか、本文でこれまで嗜んできた趣味についても記述されており、そこに音楽についての記述がある場合がある。1.3

9 代表的趣味の見出しだけでは舞踊が何を指すか判然としませんが、本文の記載で日本舞踊を指している場合が多かったので、以下日本舞踊として一括する。

で紹介した竹居富美子の箏にかんする記述のようなものである。すでにやめている場合、本格的に稽古を受け一時的に中止している場合、最近になって始めた場合など、取りくみ方には濃淡があるが、経験したことには変わりはない。そこで、本文のなかで、ピアノ、長唄、箏曲、日本舞踊、ヴァイオリンについて、代表的趣味には掲げていないが経験したことが記述されているものをすべて拾いあげていくと、ピアノ 121 名、長唄 69 名、箏曲 45 名、日本舞踊 19 名、ヴァイオリン 12 名の令嬢が確認できる。

以上の人数を、代表的趣味の人数と合算すると、全令嬢 346 名のうち、208 名がピアノ、139 名が長唄、64 名が箏曲、49 名が日本舞踊、15 名がヴァイオリンの経験があったことが明らかになる。割合としては、令嬢の 60% がピアノ、40% が長唄を嗜んでいた。邦楽である長唄と箏曲を合わせれば、ピアノとほぼ同数である。

3.2 趣味としての長唄

令嬢の嗜む邦楽器としてこれまでイメージされてきたのは、三味線よりも箏ではなかったであろうか¹⁰。三味線音楽は、俗曲として一括りにされ、遊里や芸者の音曲として連想されることはあっても、良家の子女の音楽として語られることは少なかったように思われる。劇場を前提としない箏は、深窓でひとり爪弾く娘の姿をイメージしやすかったのかもしれない。だが、本稿で調べた昭和初期の令嬢たちが嗜んでいたのは長唄であり、箏曲は長唄の半数にも及ばない。日本舞踊の地に、三味線音楽が用いられていたことも考えれば、三味線の音は多くの令嬢の周りに鳴り響いていたことになる¹¹。

1922（大正 11）年、中内蝶二は、雑誌『女性』に「家庭音楽としての長唄」と題する記事を寄せている。中内は冒頭で「長唄全盛の時代であります」と宣言したうえで、次のように述べている。

長唄は非常な勢ひを以て流行し始めました。洪水の堤を決するやうな勢ひで家庭に進入して参りました。最初は主として下町の家庭に歓迎されてゐたものが、華族の家庭にも入つてまゐりました。学者の家庭にも入つてまゐりました。畏くも高貴の方たちの間にも、この音楽が歓迎されてまゐりました。（中内 1922：160）

10 玉川裕子は、日露戦争以降の山の手地域の拡大に伴う新しい生活様式の確立のなかで、「都市のエリート
の娘たちの稽古事は、この地区の拡大に伴って、琴から洋琴、すなわちピアノへと移ってきたのである」（玉川 1998：72）と述べている。

11 1924（大正 13）年から 1928（昭和 3）年にかけて発行された女性向け月刊誌『婦人グラフ』の令嬢紹介のページに登場する令嬢について調べた高月智子と野澤慧子による考察によれば、音楽の趣味の記述は、ピアノ、長唄、箏、声楽の順で多かった。邦楽では、当初箏がもっとも多かったが、1926（大正 15）年以降長唄に追い抜かれる。全令嬢数に占めるそれぞれの趣味の割合についてみると、箏は、1925（大正 14）年に 20.0% でピークを迎え、16.9%、14.3%、15.2% と年々減少の傾向を示すのに対して、長唄は 16.0%、22.5%、27.3%、25.7% と増加傾向を示している（高月・野澤 2003：191-3）。

このようにみると、長唄は大正後期あたりにはかなりの流行をみており、下町ばかりでなく、華族やエリート層にも好まれていたことが伺える。

つづけて、中内は次のようにもいう。

江戸時代に完成せられた音楽は、一体に花柳情調の重きをおいて、色気本位に傾いてゐます。随つてその歌詞にも淫猥な文句が多いのです。節調も艶と色気とを主としてゐるのです。何う考へても高尚な家庭的の音楽ではありません。／之に反して、長唄の調節には莊重な趣を備へてゐます。……数ある曲のなかには、二三文句の如何はしいものも残つてはゐますが、それすら節調が美しくて上品なために、少しも厭らしい観念を起こさせないのであります。／唯、こゝに一と一つの欠点は、徳川時代に作られた長唄には、その歌詞の支離滅裂、前後の關係を欠いで、殆んど意義をなさないものゝ少なくないことであります。それにも拘らず、なほ面白く聴くことの出来るのは節調が優れて美しいからであります。(中内 1922 : 160)

近世邦楽は全般的に色気本位で淫猥なものが多いが、長唄だけは違う。三味線音楽でも長唄は、上品で家庭的であり、高貴な子女にも歓迎されていると、中内は述べる。

中内の主張のなかで興味深いのは、歌詞にはいかがわしいもの、支離滅裂なものがあるが、「節調」が美しくて上品であるために趣があると考えている点である。「節調」、つまりメロディーやサウンドといった音楽面を、歌詞、劇場や座敷といった演奏状況、歴史的背景と切りはなしている。中内自身、長唄の歌詞の新作を手がけていた。

音楽の音響的側面に美的な価値を見だし、それ以外の要素を排除しようという発想は、いうまでもなく西洋芸術音楽における自律性の影響を感じさせる。さらにいえば、音響的側面だけを取りだして、近世や花柳界のイメージを切断することによって、音にたいする意味づけや感受性を、「家庭」や「上品」ということばを選びとりながら更新してもいる。令嬢たちは、三味線の稽古をしながらも、近世的な色気をまとうことは許されなかった。

令嬢と長唄の關係を結びなおした要因として、長唄の演奏団体の結成が考えられる。これにより、長唄は歌舞伎とは別に鑑賞され、演奏されるものとなっていた。1902（明治 35）年結成の長唄研精会（杵屋六四郎・吉住小三郎）をはじめとして、長唄鶴鳴会（富士田音藏・杵屋榮藏・望月太左衛門）、長唄芙蓉調（富士田音藏・松島庄十郎・杵屋佐吉）、長唄正調会（芳村孝次郎・杵屋勝太郎）、吉住会、岡安会、女性門弟の会である杵六会（植木店門師商連）など、明治後期から大正にかけて長唄の演奏や新作を担う団体が結成された。次項でみる令嬢の長唄師匠にも、この関係者は少なくない。

ジャンル間の流行の趨勢も考慮する必要があり、長唄と箏の關係、あるいは洋楽と邦楽の關係は変わるものである。音楽にたいするまなざしや趣味全体のなかでも位置づけも変化している。よって、簡単には定式化できない。また、箏のように実際の稽古状況とイメージとがずれてくる可能性もある。その場合には、なぜそのイメージが残存していたのかという点は、別途

検討を要する問題である。

3.3 音楽趣味の地域分布

2.1 でみたように東京市内における地域的特性と、趣味の分布には一定の相関が認められると考えられる。全令嬢 346 名をそれぞれの地域について、趣味別に整理したものが表 5 である。

地域的特性と音楽ジャンルとの相関は、どの程度認められるだろうか。便宜的に東京を下町地域、山の手地域、新興地域に 3 地域に分け、それぞれの地域の令嬢数にたいする各趣味の経験者数を割りだすことにする。本稿では、川向うと呼ばれていた地域も含めた下町地域として神田区、日本橋区、京橋区、下谷区、浅草区、向島区、深川区、山の手地域として麹町区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区、淀橋区、小石川区、本郷区、新興地域として品川区、荏原区、目黒区、大森区、世田谷区、渋谷区、中野区、杉並区、豊島区、滝野川区にひとまず分けることにする。これらの地域について、ピアノと長唄に絞って検討してみよう。

試みに、各地域の令嬢数にたいするそれぞれの趣味を嗜んでいると語った令嬢の割合を百分率（小数点以下切りすて）で算出してみる。

下町地域ではピアノ 34%、長唄 62%、山の手地域ではピアノ 63%、長唄 41%、新興地域ではピアノ 60%、長唄 31%となる。下町の令嬢には東京市全体の傾向とはかなり異なる特徴がみられる。山の手地域の令嬢のあいだでは、たしかにピアノは多いが、長唄もさかんで、両種目とも東京市全体の傾向と同程度である。新興地域では、渋谷区を中心にピアノ趣味が多く、長唄への言及は全体からみて少ない。

以上の数値から判断する限り、令嬢の音楽種目の選択は、ある程度の地域的な特徴を示していると考えられる。とくに下町地域のピアノと長唄、新興地域の長唄に地域的な嗜好傾向が表れている。各区別に稽古経験の割合を割りだすと、ピアノと長唄のいずれか、もしくは両方について東京市全体の標準から 10%以上の偏差がある区が多く、区ごとの傾向も見いだせる¹²。とはいえ、その地域の令嬢も両方の趣味に高い率で言及しており、どんなに少なくとも 30%を下回ることはない。よって、趣味の選好を地域性だけに還元することはできない。

12 各区の令嬢数にたいするピアノと長唄の稽古経験率を百分率で割りだし、区名（ピアノ：長唄）というかたちで示すことにする。まず目立った特徴を示しているのは、神田区（0:60）、日本橋区（0:60）、京橋区（42:57）、向島区（0:100）の 4 区と、小石川区（75:24）、渋谷区（71:28）、杉並区（80:0）、滝野川区（75:25）の 4 区である。東京市内の令嬢全体の 60%がピアノ、40%が長唄を趣味としていたことを考えると、これらの区ではピアノと長唄のいずれもが 10%以上の偏差を示している。東京市の令嬢全体の特徴と比較して、ピアノか長唄の一方がとくに支持されているにもかかわらず、他方はさほど支持されていなかった傾向がうかがえる。

ピアノと長唄どちらか一方だけが 10%以上の偏差を示している区としては、芝区（55:22）、牛込区（58:29）、品川区（57:14）の 3 区があり、東京市全体と比較すると、ピアノは平均的だが、長唄への親しみが薄い。また、麹町区（50:50）、四谷区（50:50）、本郷区（50:50）、大森区（63:54）、中野区（58:58）となり、ピアノは平均的だが、長唄を嗜む令嬢が相対的には多い。

麻布区、赤坂区は、いずれの音楽も親しむ令嬢が東京市全体からみると多く、人数自体は少ないが下谷区の令嬢も音楽を嗜んでいた。荏原区、目黒区、世田谷区は音楽自体への親しみが全体的に薄く、淀橋区、豊島区は平均的である。

表5 居住地別音楽趣味

地区	ピアノ	長唄	箏曲	日本舞踊	ヴァイオリン	全令嬢数
麹町区 (千代田区)	14	14	6	4	0	28
神田区	0	3	1	3	0	5
日本橋区 (中央区)	0	3	2	1	1	5
京橋区	3	4	2	1	0	7
芝区	15	6	3	5	2	27
麻布区 (港区)	18	13	2	5	0	24
赤坂区	17	11	3	2	1	22
四谷区	3	3	3	0	0	6
牛込区 (新宿区)	14	7	4	5	1	24
淀橋区	13	10	3	1	0	23
小石川区 (文京区)	22	7	8	3	5	29
本郷区	10	12	3	2	0	17
下谷区 (台東区)	4	4	0	2	0	6
浅草区	1	1	0	0	0	2
向島区 (墨田区)	0	2	0	0	0	2
深川区 (江東区)	2	1	0	0	1	2
品川区 (品川区)	8	2	2	2	1	14
荏原区	1	1	1	0	0	4
目黒区 (目黒区)	2	1	2	0	1	5
大森区 (大田区)	7	6	0	1	0	11
世田谷区 (世田谷区)	2	1	1	1	1	5
渋谷区 (渋谷区)	20	8	7	1	0	28
中野区 (中野区)	7	7	2	3	0	12
杉並区 (杉並区)	4	0	2	0	0	5
豊島区 (豊島区)	5	4	3	1	0	10
滝野川区 (北区)	3	1	0	3	0	4
その他	13	7	4	3	1	19
計	208	139	64	49	15	346

3.4 音楽趣味の師匠

「令嬢総覧」には、令嬢が稽古を受けた師匠の名前も記載されている。必須事項ではないので記述がない場合もなかにはあるが、令嬢の趣味がどのような人物に支えられていたのを知ろううえで重要である。表6は令嬢の師匠名を各種目別にまとめたものである。人物名は、本文の記載にある通りとした。

ピアノでは幸田延、萩原英一、小倉末子、本居長世、長唄では杵屋榮藏、吉住小三郎、杵屋佐吉、箏曲では今井慶松、山室千代子、ヴァイオリンでは近衛秀麿、草川信といった著名な音楽家の名前が数多く挙がる。邦楽では、新曲創作や演奏団体の結成など、洋楽の導入を受け新たな活動を展開していった人物も目立ち、彼らの音楽活動と令嬢への教習との関係という問題が浮かびあがる。

表6 稽古を受けた師匠

ピアノ
足立(1)、天野(1)、アミアツポー(1)、荒木(2)、ポールセンナタリヤ(1)、ポール(ロシア人)(1)、ジェームス・ダン(1)、ダン道子(1)、伊達アイ子(1)、海老名(1)、江澤清太郎(1)、藤田喜代子(1)、福井(1)、萩原英一(4)、花井(1)、原(1)、原ヌイ子(1)、ハサウエイ(1)、林(東京音楽大学)(1)、日高(1)、平野武子(1)、弘田龍太郎(2)、久萬鏡子(1)、市川(1)、一宮道子(2)、一宮(1)、井口(1)、井上文字(1)、井上ノブ子(1)、石橋マスエ(1)、伊東(1)、伊藤(1)、岩村(1)、岩村俊子(1)、泉(1)、泉(中野高女)(1)、加賀川(1)、上浪(2)、上沼フサ子(1)、神戸綾子(2)、神戸絢子(1)、金子(雙葉高女)(1)、川上アヤ子(1)、風間(1)、小林禮(1)、小松耕輔(2)、後部(東京音楽大学)(1)、幸田延子(6)、前澤サチ子(1)、増田(1)、松島ツネ子(1)、松島(学習院教授)(2)、メトロポールス(1)、水口幸麿(1)、森本(3)、本居長世(1)、長坂好子(1)、中澤(1)、那須トミエ(1)、西村(2)、西村貞子(1)、ニユルカー(1)、野村(1)、小川(1)、萩野綾子(1)、小倉末子(2)、大西禎子(2)、大西(1)、大伴アイ子(1)、大山たま子(2)、大山(1)、ピーク(1)、ロスタレス(1)、ローゼンスタント(1)、佐賀清子(2)、堺テイ子(1)、境(2)、坂本(1)、佐藤美子(1)、成城(1)、關(1)、關口(1)、柴田秀子(1)、柴田(1)、渋谷敦子(1)、白山(1)、鈴木マサヲ(1)、鈴木ノブ子(1)、鈴木(1)、多賀谷千賀子(1)、多賀谷(1)、高橋ヒデ子(1)、高堀(1)、高折宮次(2)、武岡鶴代(1)、玉井きく子(1)、玉井キミ子(1)、田村管子(1)、田村(成城学院)(1)、田村(1)、田中銀之助(1)、田中(東京音楽学校)(1)、田中(1)、達原(1)、トドロイチ(1)、内田琴子(1)、山田キクエ(1)、山越照子(1)、山越(1)、山根サダエ(1)、山根(1)、山下シゲ子(2)、山下ヨハナ(1)、山脇(3)、矢田部(2)、吉田信子(2)、吉田ノブ子(2)、吉田(1)、渡邊(東京音楽大学)(1)、渡邊(1)、東京音楽学校(3)、東京音楽学校分教場(神田駿河台)(9)、東京音楽学校分教所(児童音楽院)(1)、東洋音楽学校の先生(1)、東洋英和女学校の先生(1)、女学校の先生(2)、学校の外人の先生(1)、母校の先生(1)、雙葉会(4)、YWCA(1)、幼稚園日曜学校(1)、近所の幼稚園の先生(1)、アメリカ人宣教師(1)、ドイツ人の先生(1)、母(1)、親戚(1)、知人・友達(7)、第一高女出身の先輩(原(1)、独学(1)、不明(11))
長唄
青木(1)、北條(1)、藤田音飛奈(1)、富士田(1)、花柳山室(1)、勘壽(1)、勝太郎門人勝照(1)、杵屋榮藏(1)、杵屋榮藏門人(1)、杵屋榮松(1)、杵屋榮登利(1)、杵屋惠津陽(1)、杵屋五三郎(2)、杵屋彦吉(1)、杵屋彦龍(1)、杵屋廣助(1)、杵屋勘榮(1)、杵屋勘喜代(1)、杵屋勘次(2)、杵屋完之(1)、杵屋寛助(1)、杵屋勘登代(1)、杵屋勝三郎(1)、杵屋勝志出(1)、杵屋喜久(1)、杵屋小七郎(1)、杵屋六伊登(1)、杵屋六次(1)、稀音家六治(2)、杵屋六丸(1)、杵屋六松(1)、杵屋六松次(1)、杵屋六松香(1)、稀音家六四鶴(1)、稀音家六四郎(5)、杵屋六繁(1)、杵屋六種(1)、杵屋六輔(1)、杵屋六洋(3)、杵屋六勇喜(1)、杵屋六左衛門の高弟(1)、杵屋六花(1)、杵屋六吉(1)、杵屋佐吉(4)、杵屋佐喜葉(1)、杵屋正左衛門(1)、杵屋四鶴(1)、稀音家四郎吉(1)、稀音家四郎助(1)、杵屋武由(1)、杵屋登代次(1)、杵屋卯三郎(1)、杵屋和八(1)、杵屋和歌(1)、杵屋和歌代(1)、杵屋和吉(1)、稀音家和喜次郎(1)、杵屋和三郎(1)、稀音家和三郎(1)、稀音家和佐次郎(1)、杵屋八重路(1)、杵屋彌三郎(1)、杵屋彌七(5)、杵屋ヨネ(1)、杵屋某(4)、今藤長十郎(1)、松永和風(1)、松島松女(1)、中村小歌(1)、岡安喜三(1)、岡安多津(1)、岡安(2)、大澤(1)、吉住小鶴(2)、吉住小五郎(1)、吉住小初(1)、吉住小早(1)、吉住小稻(1)、吉住コカネ(1)、吉住小桂(1)、吉住小三郎(2)、小三郎の門人(1)、吉住小齊(1)、吉住小三藏(2)、吉住小竹(1)、吉住小玉(1)、吉住小龍(1)、吉住小桃次(1)、吉住小徳(1)、吉住コトミ(1)、吉住小常(3)、吉住小米(4)、吉住派田中(1)、吉住(1)、吉住派(2)、芳村榮四郎(1)、吉村糸吉(1)、吉村伊四壽(1)、友作(1)、東京音楽学校長唄科(1)、親戚(1)、知人(3)、近所の某氏(1)、不明(3)
箏曲
天笠(生田流)(1)、千布(山田流)(1)、福田菊子(生田流)(1)、福原荻道(1)、古澤照子(山田流)(1)、萩岡氏門下福永(山田流)(1)、平井美奈勢(山田流)(1)、平井善奈瀬(山田流)(1)、平井(1)、廣田(山田流)(1)、池田杉野(山田流)(1)、今井慶松(3)、今井氏門人薄井(1)、菊辻(1)、越野松賀(山田流)(1)、櫛田榮調(2)、落合ヤスエ(山田流)(1)、小笠原(1)、小川(山田流)(1)、太田須賀勢(山田流)(1)、町田杉勢(山田流)(1)、町田(山田流)(1)、増田(1)、増見スイ(今井慶松門人)(1)、宮下寛一(山田流)(1)、中橋(1)、中村(山田流)(1)、中野榮重(山田流)(1)、中澤喜美榮(山田流)(1)、根本旭升(山田流)(1)、島田紀元(山田流)(1)、諏訪(1)、高橋(山田流)(1)、高西(山田流)(1)、丹内(2)、富保増子(生田流)(1)、戸澤民十郎(1)、上田(山田流)(1)、渡邊(山田流)(1)、山室千代子(山田流)(2)、山崎美都賀(1)、独学(1)、不明(山田流)(2)、不明(1)
日本舞踊
阪東三津之丞(1)、藤陰静江(2)、藤陰芳枝(1)、藤間春枝(1)、藤間勘衛門(1)、藤間勘五郎(1)、藤間勘次(4)、藤間勘治(1)、藤間勘壽郎(2)、藤間勘十郎(5)、藤間勘三郎(1)、藤間勘素我(1)、藤間絹衣(1)、藤間スエ(3)、藤間章吉(1)、藤田ツタエ(1)、花柳吉兵衛(1)、花柳吉延(1)、花柳吉世(1)、花柳壽右衛門(1)、花柳壽三郎(2)、花柳壽輔(5)、花柳勝次郎(1)、花柳壽喜(1)、花柳六壽(1)、花柳章太郎(1)、花柳壽衛(1)、花柳壽加江(1)、花柳壽美(2)、花柳壽満(1)、花柳徳太郎(2)、花柳芳喜美(1)、花柳某(1)、水木(1)、西川喜洲(1)、西崎緑(1)、西川(1)、若柳吉豊(2)、若柳吉與志(1)、若柳四郎(1)、若柳吉枝(1)、若柳吉増(1)、若柳吉三郎(1)、母(1)、親戚(1)
ヴァイオリン
安藤幸子(2)、平戸龍也(1)、片山アリス(1)、近衛秀麿(1)、草川信(1)、奥村つや子(1)、多久寅(1)、中村(1)、清水(1)

() 内は令嬢数



図2 本居長世ミュージック・スタジオ（『音楽雑誌ムジカ』5（6）、1933年）

日本舞踊では西崎緑の名前がみられるが、西崎は「令嬢総覧」の令嬢としても紹介されている。西崎は、1930（昭和5）年に若葉会を結成し、新舞踊の創作に努めた。藤間勘素我もまた、高橋是清の孫で、茂登女会を結成した若手の女性だった。

多くの令嬢は第一線で活動する専門家を師匠としていた。おそらく師匠たちもまた、こうした令嬢を多く生徒として教室を営んでいたと察せられる。師匠が令嬢の家まで足を運んでいた場合も考えられるが、同じ音楽教室のなかでは、ほかの令嬢や裕福な家庭の子弟との交流が生まれることもあっただろう。令嬢は、当時の最高水準の演奏技術に触れながら、経済的にも、社交的にも、教養や嗜好の点でも、ほかの階層では実現されない独自の文化的圏域を形成していた。

表6は令嬢の階層的特徴を説明するばかりでなく、昭和初期の東京における民間の音楽教習の状況を俯瞰的にみるうえでも役立つ¹³。そもそも令嬢が多様な趣味に親しむことができたのは、たんに経済的に裕福なだけではなく、東京という都市に在住しているためである。とくに、長唄と東京という地域性の関係は忘れることができない。関西や九州、外地などの都市や農村部富裕層の令嬢が、東京とは別の邦楽に接していたことは想像に難くない。

13 塚原康子は、『明治41年東京市市勢調査職業別現在人口表』を分析し、明治末期の東京に鳴り響いていた音楽の状況を再構成している。東京市15区のなかで三味線音楽師匠は、浅草区243名、日本橋区200名、京橋区143名、神田区116名、芝区99名の順であった。これらの地域は震災による火災の影響がとくに甚大だった地域であり、江戸の三味線音楽を中心に、東京の音楽空間を大きく書きかえた。本稿の考察とつきあわせると、三味線音楽のなかでも長唄だけは、昭和初期の東京の幅広い地域の令嬢に普及していたことがわかるが、反面、義太夫、一中節、端唄などは引きつがれていないこともわかる。

4. 書物のなかの令嬢

4.1 規範としての令嬢

令嬢とは、語られる存在であって、ある特定の属性によって定義されるものではない。昭和初期、令嬢とはなにかを定義して、三宅やす子は次のようにいった。

令嬢は、未婚婦人の敬称でせう。未婚の婦人であるかぎり、令嬢の名は冠せられる筈ですが、令嬢たるにふさはしい素養と、令嬢らしい態度とが具はつて居なければ、令嬢とはよびにくいのです。(三宅 1931 : 4)

三宅は、令嬢の要件として、女性、未婚、敬意の対象であることを挙げている¹⁴。くわえて、令嬢らしい素養、態度とことばを継いでいる。とはいえ、令嬢を定義するために令嬢らしい素養や態度を具備していることを挙げるのはトートロジーでしかない。これは、令嬢がさまざまな人によってどのようにでも語られてしまうことばであることを示している。

つづけて三宅は、次のようにも述べる。

こゝに私のいはうとする「令嬢」は必ずしも、流行の着物をきて居なくてもいゝのです、必ずしも爪に紅をさゝなくても、野球と映画の話をしなくても、——しても勿論かまはないが——未婚者の持つて居る独特の朗らかな、独特ののびのびした気持、そしてどこまでも成長してゆかうといふ元気を持つて、古い滓にわづらはされない女性——それを令嬢と呼びたいと考へて居ます。／令嬢は、また、もつと広く、現代の女性、或は新時代の女性といふ解釈もされ得ます。(三宅 1931 : 5)

三宅のいう「新時代の女性」というのは、物事の感じ方とその表現の仕方、生活内容がすべて新しく、自分の意見や信念をもち、たえず進歩向上を心掛ける女性という意味である。モダンガールのような女性像はすでに古いものであり、歯切れがよく朗らかな令嬢が新しい女性像であると三宅は述べる(三宅 1931 : 6-9)。

もちろん、三宅の主張する令嬢像がひろく共有されていたかは考慮しなければならない。また、「令嬢総覧」に掲載されているような令嬢と、まったく同質だとはいえない。だが、令嬢という語は、規範として未婚女性の身体的なふるまいを規定する言語であり、令嬢にふさわし

14 令嬢の対概念は複数考えられる。当時は「令女」と呼ばれていた敬意を集めている既婚の女性、尊敬を集めていない未婚女性、経緯の対象となる未婚男性などである。また、「未婚」ということばのうちに暗黙に潜んでいる「いずれ結婚すべき」という含意の対として、社会的尊敬を集めている未婚の女性で、今後も結婚する意志のない女性も考えられる。

い素養や趣味を要求するものであったことがうかがえる。当時の女性雑誌に令嬢にふさわしい身振りや趣味を紹介した記事や付録が散見されることからわかるように、令嬢は、生まれながらの存在というよりも、女性が目指すべき規範として、消費の欲望とも絡みあいながら提示されていた。

このとき、音楽は、身体の魅力的な管理技術であった。令嬢は、周囲からの羨望を集め、みずから望んで音楽を享受することができた。しかし、そのような音楽の趣味も、じっさいには階層と家父長制によって塑造され更新される女性像を体現したものであり、父親や将来の嫁ぎ先から自由ではなかった。したがって、西洋音楽の受容と民間への普及における令嬢の「活躍」を称揚するのは、性の二項対立の普遍性を追認する。新しい女の主体性や能動性の称揚が、権力関係やヒエラルキーを解消することなく温存させていったことは、すでに多くの女性史研究が教えている。

三宅のいうような「どこまでも成長してゆかうといふ元気を持つて、古い滓にわづらはされない女性」が令嬢であるならば、規範的な趣味を拒絶し、音楽から離れる、あるいは望ましいとされる温情主義的な趣味のリストから漏れる音楽ジャンルを選択していく女性が登場していても不思議はない。令嬢であり続けながらも令嬢的な規範を書きかえ、ずらしていくような令嬢自身の実践も考えられる。しかし、「令嬢総覧」にその芽をみることは難しく、むしろ特定の音楽と令嬢とを切りはなしがたいものになっている。

4.2 『趣味大観』という資料と方法

令嬢と音楽の関係が固定的な語られ方にならざるをえないのは、令嬢という対象の特性と並んで、資料的制約による側面が大きい。令嬢とは、他者から名指されるものであり、しかも日常よりも改まった場面で用いられることばである。そのため、「令嬢総覧」に書かれているのも、規範的な令嬢像に即して語った外向けの自己である。

こうした自己の提示を可能にしたのは、書物や雑誌という媒体である。令嬢なるものの定義や合意の有無にかかわらず、令嬢は書物のなかで、令嬢と呼ばれる当事者とは別のところで、実体としてあるかのように仮構される。「深窓の令嬢」ということばとは裏腹に、令嬢の図像やプロフィールは複製され、流通し、不特定多数の目に晒されることによって、令嬢は成立していたといえる。「令嬢総覧」の令嬢は、ブラックボックスとしての規範性を与件として、実在する人物が当てはめられ、例証的に提示されたものである。だが、逆に、例示のため呼びだされた令嬢は、規範性を書きかえ、ずらしていく可能性を潜在的に宿すことにもなる。

『趣味大観』という書物は、当時さかんに令嬢グラビアを掲載していた女性雑誌以上に閉じたパッケージメディアであり、権力的な装置である。雑誌に登場する令嬢は、毎号部分的に掲載される断片的なもので、掲載データは「令嬢総覧」よりも少なく一貫性がない。また、時期が過ぎれば読みすてられてしまう可能性の高いものである。これにたいして、『趣味大観』は、大規模な集成、比較参照可能な一貫したデータ、長期の所蔵を前提とし、事典や電話帳などの

データベースの類に近い形態をとっている。刊行の背景に、令嬢を調査し、集成し、語る欲望が広がっていたことを暗示する。

『趣味大観』を手にした読者が、どのようにこの書物を利用したのかはもはや想像するしかない。データの集成であるので、少なくとも読みものとして通読されるようなものではなかったと思われる。応接間の書棚に置かれていたのかもしれない。あるいは、「令嬢総覧」にかんしていえば、見合い写真をみるような感覚で読まれていた可能性もある。持ちはこべないほどの重さではないので、パーティーや社交の場に持ちだされ読まれていたかもしれない。

いずれにせよ、令嬢は、語られ書かれた存在である。よって、本稿で言及してきた資料や表などを用いて、令嬢の存在を実体的に捉えるわけにはいかない。令嬢を語るための道具として、趣味や音楽がどのように用いられていたのか、どのようなキーワードがどの程度動員されたのかといった視点で捉えるべきである。

くわえて述べれば、本稿の事例の場合、調べられる令嬢数が増えれば、より信頼性の高いデータが得られたらという発想は一種の強迫観念であり、退けなければならない。そもそも調べられるべき全体像が恣意的にしか存在しない以上、サンプルや代表性といった問題を議論しても意味がない¹⁵。調査数を多くすることで、令嬢の社会的構築に手を貸すことはあっても、事態を正確に捉えることができるわけではないのである。むしろ、すでに与えられている資料を仔細に検討し、書物に記されていないことへの想像力を含んだ、新たな問いを立ちあげていくことのほうが大切である。

おわりに

本稿では、『趣味大観』中の「令嬢総覧」を検討しながら、当時の令嬢と目される人々のあいだで、どのような趣味や音楽が嗜まれていたのか、より正確にはどのような嗜みが令嬢自らの特性として語られてきたのかについて考察してきた。

令嬢の趣味は、花嫁修業と音楽にかんするものを中心にしており、音楽関連ではピアノ、長唄、箏曲、日本舞踊、ヴァイオリンが挙げられていた。このような趣味を許したのは、彼女らが上位の階層出自をもち、東京という都市文化のなかに生きてためにほかならない。ときには東京市内の地域性を部分的に感じさせながら、ほかの地域や階層では許されないような趣味を享受していた。そこには、令嬢と呼ばれる女性たちのあいだで親しまれていた、独自の趣味と文化の言説的な圏域が形成されている。ひとつの都市の、ひとつの時点に限ったものであるとはいえ、曖昧なかたちでイメージされてきた令嬢と音楽との関係が、どのように語られていた

15 すでにみたように「令嬢総覧」には、「代表」という語が冠せられている。そのため、いかに恣意的な選択であれ、編集主体にとっては「代表」的なものとして捉えられている。なお、社会調査における対象の設定とサンプルの問題については、佐藤（1998：258-60）を参照。

か、どのように語られるべき存在として提示されていたのかは、ある程度明らかにできたことと思われる。

しかし、上位の階層や東京がつねに文化の中心で、みながこれに追従していたというわけでもなければ、令嬢たちが自由な趣味の選択をできていたわけでもないことは、容易に推論される。かといってブルデューの議論などを外挿的に用いて、文化的再生産の構造を指摘することも、すでにさまざまなかたちで説明されてきた既知の理論を音楽面で説明したという以上の意義をもたないだろう。

西洋音楽史の受容という視角からのみ、令嬢の趣味を捉えてその意義を称揚することは、さまざまなバイアスを生む危険をもつ。本研究はいまだ試みの域を出てはいないが、今後の発展のためのひとつの方向として、ジェンダー研究と呼ぶうる水準にまで議論を深めていく道がある。そのためには、令嬢のなかに内面化された規範性、書物、家父長制といった権力の問題に正面から取りくみ、二項対立的な性の普遍性に揺さぶりをかけていくような資料と方法論の用意が必要だ。

とりわけ、音楽は身体的な働きかけを特徴とするものであり、令嬢の身体感覚についての考察を要請する。ある特定の楽器や音楽を身体化していった令嬢が、意図的にその音楽や身体感覚から離れていたり、別の音楽や身体感覚を選択し育てていたりすることのなかに、突破口がみえてくるかもしれない¹⁶。文字資料に依拠することの限界を抱えながらも、鳴り響いては消える音楽という対象の特性と、資料に書きのこされなかった声とをどちらも排除することなく、令嬢と音楽の歴史を語りなおさなければならない。

【付記】 本稿で用いた『趣味大観』については、東京大学大学院人文社会系研究科渡辺裕先生にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。執筆にあたり、日本学術振興会による平成23年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けた。

（本学講師＝音楽教育学担当）

参考文献

青野季吉, 1930, 『サラリーマン恐怖時代』先進社.

三宅やす子, 1931, 『令嬢学』宝文館.

中村美亜, 2008, 『クィア・セクソロジー——性の思いこみを解きほぐす』インパクト出版会.

坂本麻実子, 1999, 「明治時代の公立高等女学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』53: 45-56.

16 音楽的な身体と性的な身体とは、ともに生理的な反応と思われやすいが、社会的、心理的、歴史的に構成されてきたものでもある。クィア研究の視点から、中村美亜は、どちらの身体もみずから選びとり、変えられるものであることを示している（中村 2008: 54）。

- , 2002, 「稽古する娘たちの明治日本と西洋音楽」『富山大学教育学部紀要』56 : 61-8.
- 佐藤健二, 1998, 「「方法」から見た調査」石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る力——社会調査という認識』八千代出版, 237-344.
- 關巖二郎, 1892, 『明治の令嬢』文武堂.
- 高月智子・能澤慧子, 2003, 「1920年代若い女性の理想像——『婦人グラフ』に見る令嬢たち」『東京家政大学博物館紀要』8 : 185-94.
- 玉川裕子, 1998, 「お琴から洋琴へ——山の手令嬢のお稽古事事情」『音楽芸術』56 (2) : 70-6.
- 寺出浩司, 1994, 『生活文化論への招待』弘文堂.
- 塚原康子, 2006, 「明治末期の京橋区の音楽空間——『明治41年東京市市勢調査職業別現在人口表』浅草区・日本橋区・京橋区の比較から」『銀座文化研究』9 : 45-51.
- 鶴橋泰二編, [1935] 1936, 『趣味大観』趣味の人社.
- 安田寛・北原かな子, 1998, 「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』80 : 37-47.